

## 研究ノート

### ソシオン理論の骨子 (1)

木 村 洋 二

## An Outline of the Socion Theory (1)

Yohji G. KIMURA

### Abstract

"Socion"("social + neuron") is our term for a knot of social networks determined by trust or distrust. The strength of trust and distrust is learned by socions to create some form of order in the social network. Socion networks are composed of three layers; the first is the organism, the second is the representation and the third is the symbol. The dynamics of networks consist of mapping processes between these layers. There are two kinds of converter of trust and distrust. The one is a "dyon", the other is a "trion". A dyon is a dual unit, whereas a trion is a triadic unit. Trions with two negative and one positive relations are stable("balanced"). Stable trions generate "expect-potential" whether to trust or not to trust. A "socios" is a network whose identity is protected by immune functions of trions. A socios keeps trust inside by projecting distrust to the outside, usually the other socios. Socioses tend to form a hyper network system characterized by "antagonistic interdependence."

Key words: socion, trust, network, dyon, trion, cube, socios, love, hate, religion, balance, laughter

### 抄 録

人間は自他を信頼あるいは不信で結びあう。信－不信の重み（予期ポテンシャル）を「荷重（semio-weight）」とよぶ。ソシオン（socion；socio-neuron）は、荷重ネットワークの結び目としての個人や集団を指す造語である。ソシオンは、O身体（オブレベル）、R表象（サブレベル）、S記号（メタレベル）の3つの階層をもつ。O→R→Sへの変換を「くり込み」、逆を「くり出し」変換と呼ぶ。ソシオンは、サブレベルで2者関係を制御する荷重変換ユニット（ダイオン）と3者関係を制御する変換ユニット（トリオン）を構成する。これらの変換ユニットは、一定の「予期ポテンシャル」を出力してソシオンの行為を誘導する。行為と予期（感情）の相互誘導によって、ネットワークは荷重布置を自己組織化する。トリオンによる免疫機能を備えた有界なネットワークをソシオス（socios）と呼ぶ。ソシオスは、トーテムや国家、教団、企業、組織体のように、中心に正あるいは負の荷重体をもつ共有結合のネットワークを構成する。ソシオスは外部に負の荷重（不信）を吐き出し、内部に正の荷重（信頼）を取り込む。複数のソシオスはしばしば相互に否定結合して超ソシオスを形成する。

キーワード：ソシオン、信頼、ネットワーク、ダイオン、トリオン、キューブ、ソシオス、愛、憎悪、バランス、笑い

## I ソシオンとはなにか

### 1. ソシオンは荷重ネットワークの結び目である

ヒトは自他を信頼あるいは不信で結びあう（荷重する）ことで社会ネットワークを形成する。信－不信の量（予期ポテンシャル）を「荷重（semio-weight）」とよぶ。ソシオン（socion; socio-neuron）は、この荷重ネットワークの結び目として人間や集団をとらえるための私たち（木村・藤沢・雨宮1991他）の造語である。

### 2. ソシオン理論は関係のなかで人間を思考する道具である

ソシオン理論は、「関係」としての「人間」（とその集団）の動作を理解し、説明するための道具であり、説明の枠組みである。この枠組みによれば、「人間」は、信頼あるいは不信によって結ばれた社会ネットワークの「結節」であり、個体はそれが局所的にたたみ込まれたループの複合である。

### 3. ソシオンはS、R、Oの3層多元ネットワークを構成する

ソシオンのネットワークは、記号（S: Symbol）、表象（R; Representation）、身体／行動（O: Organism／Comportment）の3層からなる多重ネットワークである。第1階層の身体（行動）系Oをオブレベル（Object-level）、表象系Rによる第2階層をサブレベル（Subject-level）、記号系Sによる第3階層をメタレベル（Meta-level）と略称する。

### 4. 荷重ネットワークの重層構造はソシオグラフによって表示される

ソシオンのネットワークは「ソシオグラフ」あるいは「ソシオマトリックス」によって表示される。ソシオグラフは、階層間のたたみ込みと荷重関係を視覚的に表現することができる。また、グラフによる思考実験は、しばしばユーモアの感覚をともなうメリットがある。

### 5. 感情の力学を説明するための概念装置（モデル）を構成する

関係性のなかにおける感情の変換を説明するための論理的＝幾何学的なモデルを構成し、思考実験によってその説明力と網羅性を検討する。最終的には、多重ループの複合動作を、コンピューター・シミュレーションによって解明することを目指す。

## Ⅱ 荷重・リアリティ・笑い

### 1. ソシオンは自他の像に荷重する

ソシオンは、自他の表象を形成して、これを選択的に重みづける（「くりこみ変換」）。好－悪、信－不信といった正－負（positive-negative）の分極性をもつこの「重み」を、両極性をもつポテンシャル量ととらえ、正（P）負（N）統一して「荷重」（semio-weight）と呼ぶ。

### 2. 荷重は予期を投射する

「荷重」は自他の間の「デキゴト」の生きた記憶である。荷重記憶は、体験の強度に応じた強さと、正負の分極性をもつ「予期」（期待や危惧）を未来側に投射する。この「予期ポテンシャル」によって、他者性（の知覚像・表象図式）が選択的に備給され、対応する自己の行動が（デキゴトに先駆けて！）誘導されうる。

### 3. 荷重はリアリティを生み出す

第2階層のサブスペースで構成されるこの表象像は、備給量に応じてオブレベルのリアリティとして体験される（「夢」のばあいを除く）。荷重の備給量（cathexis）が大きいほど表象のリアリティの感覚はつよい（存在＝表象×荷重）。ちなみに、ヒトが不在の他者（「死者」など）をリアルな存在として構成するのは、記憶表象にたいする荷重備給によるのである。

### 4. 笑いは荷重をキャンセルする

「荷重」は、体験にリアリティの感覚（威厳や畏怖、厳粛さや深刻さなど）をもたらす神経回路的な賦活出力（ポテンシャル量）である。実体は未だ確定されていないが、この「荷重」のもっとも操作的で科学的な（！）定義は「笑いによって吹き飛ばす（＝無化される）もの」である。表象に備給されたこの荷重ポテンシャルは、正負にかかわらず「笑い」の「負荷脱離機能」によって脱備給（de-cathexis）されると仮定できる。つまり、表象の現象学的リアリティは、笑いによって神経生理学的に無化（neutralize）されうる。

### Ⅲ 荷重交換とコミュニケーション

#### 1. ソシオンは3つの層でカップリングする

ソシオンは、行為の交換（L1）とコミュニケーション（L2、L3）をつうじて、自他に備給した荷重ポテンシャルを調整・変更する。L3のメタレベルはシンボルによる言語的コミュニケーション、L2のサブレベルは顔や目の表情や音調によるノンバーバル・コミュニケーションである。コミュニケーションの内部化されたループ（図のL3でメタソシオンをむすぶ小円）が内的な「意識」を構成する。

#### 2. ポジオンとネクロンの2種の交換子がある

他者とのやりとりを通じて荷重値が変更されたとき、微小荷重子が交換された、と仮想的に表現する。交換される荷重（＝信－不信の予期ポテンシャル）のうち、「愛」や「信頼」のような正の仮想荷重子を「ポジオン（posion）」、「憎悪」や「不信」といった負の荷重子を「ネクロン（necron）」とよぶ。前者は「アレ！」という「祈り」の荷重動作、後者は「ナクナレ！」という「呪い」の動作に対応する。

#### 3. 信頼はリアリティのベースとなる

他者Bへの信頼荷重が大きいくほど、その他者の発する荷重交換子の受け手にたいするコミュニケーション効果はおおきい。大きな信頼を寄せる他者のそぶりや一言は、ほめられる（ポジオン）にせよ、しかられる（ネクロン）にせよ、大きな影響力をもつ。他者への信頼荷重はリアリティの母胎である。逆に、不信を抱いている他者の言葉は、リアリティをもたない。あるいは反対のリアリティ感覚（虚偽や陰謀）を生む。

#### 4. 思考は「？」（疑問符）の運動である

複数のループからのコミュニケーション入力、1つの表象にたいして2つの異なる荷重値をもたらさう。BからAに入るXの荷重像と、Cから入る荷重像が（特に正と負に分極し）一致しないばあい、そのXの荷重値の確定をめぐって「思考」が発生する。どちらがリアルか、本当らしさ（真と偽）をめぐって両者のあいだでオペレーションが競合する。思考は多重媒介によってもたらされる荷重備給の「迷い」であり、荷重値の決定をめぐって競合する複数のループのあいだの疑問符？の運動である。

## 5. 解はかならずしもひとつではない

論理的思考はひとつの表象にひとつの荷重値を備給しようとするが、荷重オペレーションの解は多重でありうる。「振動」(アンビバレンス)や、「保留」(エボケー)といった未決定動作も、備給をめぐるループの運動であり、広い意味の思考のモードである。「排除」(聞きたくない)や「否定」(まさか!)といった思考停止現象も、安定トリオンにおける思考の形式として重要である。

## 6. 急激な負荷の上昇は驚きを、下降は笑いを生む

負荷の急激な低下(descending incongruity)は出力の余剰をもたらし、したがってしばしば「笑い」を発生する。これに対し負荷の急激な上昇は、出力不足によって「驚きwonder」を生む(H. スペンサー 1860)。笑いは、差異と同一性の間で回路が発振したとき、備給を撤収することで図式作動の混乱を回避する精神の保護回路メカニズムである(木村 1982)。

# Ⅳ 多重くり込み変換

## 1. ソシオンは2重のくり込みによって3つの層を構成する

私が私をみている他者のなかの私の像を構成するためには、私は他者の像を構成しなければならない( $f: L_1 O \rightarrow L_2 R$ )。しかし、その他者が構成した私の鏡像を、直接見ることにはできない。したがって、私の鏡像をとり込むためには、さらにもう一段の変換( $g: L_2 R \rightarrow L_3 S$ )が不可欠である。ソシオン・ネットワークの3層構成は、ヒトが鏡像に同一化することの必然的な帰結である。

## 2. 大小と円とベクトルでたたみ込みの構造と関係性を表す

線で結ばれた外円と内円がソシオンの階層縦断的な対応(たたみ込み)を表わし、小円の大きさは対象にたいする重みづけの大きさ、荷重の大きさを表現する。小円の白黒は、その荷重(予期ポテンシャル)が正か負か(信頼か不信か)に対応する。

### 3. 上位階層への変換を〈くり込み変換〉、下位への変換を〈くり出し変換〉とよぶ

$$f : L1(O) \rightarrow L2(R)$$

変換  $f$  は、第1階層オブレベルの第2階層サブレベルへのくり込みで、知覚による表象像の形成が主要な動作である。L2にくり込まれたソシオンの像と荷重をサブソシオン(sub-socion)とよぶ。

$$j : L2(R) \rightarrow L1(O)$$

L2からL1への逆方向の変換  $j$  は、サブソシオンが発生する「予期」を身体化してオブレベルにくり出す変換で、行動や行為によって物質的に外化する運動がこれに相当する。

$$g : L2(R) \rightarrow L3(S)$$

変換  $g$  はサブレベルの像と荷重をさらにメタレベルにくり込む変換で、一般にシンボルへの置き換えがこれに対応する。メタレベルにくり込まれたソシオンユニットをメタソシオンとよぶ。自他の感情への気づきや名づけ（「分別」）、あるいは洞察によるメタ意識（予期の予期）の形成などが、そのダイナミックな側面である。

$$i : L3(S) \rightarrow L2(R)$$

逆の変換  $i$  はメタレベルの記号から荷重表象への対応づけで、概念の呼び出しや名指しがこれに相当する、それにともなって荷重感情やイメージがサブレベルで喚起されることになる。

$$h : L1(O) \rightarrow L3(S)$$

変換  $h$  はオブジェクトレベルからダイレクトに記号系に直接対応づける変換で、荷重感情を媒介しない、科学的な観測や合理的な認識などがこれに相当するだろう。

$$k : L3(S) \rightarrow L1(O)$$

$k$  は逆に第三階層のメタレベルから直接オブジェクト・レベルへくり出す変換で、冷静で無機的な行動の制御や、貨幣や命令書による感情中立的な外化行為などがこれに当たる、と考えられる。

#### 4. くり込み変換は余次元を開き、くり出し変換は余次元をつぶす

第1階層L1の要素(身体)は3次元、L2の要素(表象)は2次元、L3の要素は1次元である。L1→L2→L3と階層をあげることで、くり込み写像は余次元を生み出す。ソシオンは、この余次元を活用して表象(L2)や記号の配列変換操作(L3)をおこない、情報を発生する。この情報によって、個々のソシオンのくり出し変換L3→L2→L1が制御される。

#### 5. コミュニケーションは、ネットワークの階層を水平に横断する

ソシオンは階層L3、L2を水平に横断して他のソシオンとコミュニケーションによって連結される。他のソシオンから取得した情報は荷重変換子(後出のダイオンやトリオン)を賦活して感情と思考を誘導する。誘導された予期ポテンシャルは最終的にL1の身体を駆動してオブレベルに行為として実体化される。

#### 6. ソシオンは、〈くり込みーくり出し変換〉によって多重複合ネットワークを構成する

ソシオンは、O、R、Sの3つの階層を水平に横断するコミュニケーションと、垂直に縦断する〈くり出しーくり込み〉変換を再帰的に反復しながら、3層多元ネットワークを自己組織化する。階層を縦横に往還しながら、自他の荷重をくり込み、あるいはくり出すことで、「綾取り」のように多重に交差した荷重ネットワークが構成される。

#### 7. サブレベルに3種の荷重変換子を仮定する

ソシオンの第2階層・サブレベルにおいて、2者(2項)関係を制御する荷重変換ユニットをダイオン(dyon)、3者(3項)間の変換ユニットをトリオン(trion)と名づける。それぞれの変換ユニットは、荷重記憶から正負の予期ポテンシャルを発生する。ダイオンもトリオンも、ソシオンのサブスペースで構成される回路ユニットで、自他の荷重感情を変換する演算子と仮定する。

#### 8. 変換子はサブレベルで予期ポテンシャルを発生する

モノン(monon)は自己回帰ループをもつ単体で、荷重の自己増幅、あるいは自己減衰作用によって自己塑性性を発揮する。ダイオンは、2項を連結する自由度2のループを構成し、自他の荷重交換を相互性によって制御する。トリオンは、3個のユニットを結んで自由度3のループを形成する。トリオンは、すべてがP結合(PPP)か、あるいはN結

合（否定的関係）が2個あるとき（ $PNN$ 、 $NNP$ 、 $NP N$ ）、ループ動作が安定する（ $N \times N \rightarrow P$ ）。

#### 9. トライアッドには3個のトリオンがある

3者が現実存在している（トライアッド）場合、それぞれのサブレベルにくり込まれる3者のユニット（トリオン）は3個になる。ひとつのトライアッド（3人関係）では、3個の単体（モノン）、9個の対体（ダイオン）、3個の三体（トリオン）が構成されうる。関係づけのあり方は、それぞれのソシオンによって、また時と場合によって、1者であったり、2者であったり、3者であったり異なりうる。

#### 10. ソシオンは多重現実の複合ネットワークを構成する

ソシオンのネットワークは、それぞれのソシオンによる選択的な「くり込み」と「くり出し」の運動の多重性によって、不一致や未決定性を内蔵しつつ、複合的に編み上げられる多元3層ネットワークである。そのサブネットの要素構成の違いや関係性のズレ（相互主観性のズレ）が、ネットワークに緊張と運動を引き起こす、と考えられる。

### V ソシオンのキューブモデル

#### 1. ダイオンは、荷重を反対称変換することで、他者性の予期を発生する

ダイオンは、モニターした自あるいは他の荷重を正負反対に対称変換することで、自己性あるいは他者性の予期ポテンシャルを生み出す。この予期ポテンシャルは、知覚系に与えられていない他者あるいは自己の存在を、サブスペースにおいてリアルに構成する。これによって、ソシオンは実際のデキゴトの到来に先駆けて対応行動をとることが可能となる。

#### 2. シーソー変換はシャドーを生む

意識が他Oあるいは自Sを指向して荷重オペレーションを加えたとき、反対側に反作用として発生するこの無意識的な荷重をシャドーとよぶ。ダイオンの自他反対称変換（シーソー変換）によって構成されるこの荷重は、指向の陰に入ることによって意識の対象から外れて無意識的に生きられることがおおい。自己と他者はサブスペースで互いにシャドーとなりうる。



### 3. 自他の荷重差は愛と欲望を生み出す

ソシオン（ヒトとその仲間）は、他者の荷重像と自己の鏡像を比較することで自他の荷重差を検出する。この荷重差にたいする態度と動作が、ソシオンの社会的行動を駆動するエネルギーとなる。自己Sの荷重を上げて他者Oの荷重を下げる動作を「欲」、他者Oの荷重を上げて自己Sの荷重を下げる動作を「愛」と呼ぶ。

### 4. ダイオンは8種類の荷重動作を発生する

荷重差をふくむ2者関係では、自もしくは他について、正あるいは負の荷重を、増大するか減少するか、で8つの動作が論理的に区別できる。これらの荷重動作は、荷重差をふくむ社会関係一般において発生可能な社会的な感情と対応する。

### 5. 優位者Aに4種類の可能動作がある

比較優位者Aは、自己 Ego/Self の荷重像について上げる (Positive-operation 1 誇る) か、下げる (Negative-operation 2 慎む) か、2種類の動作が理論的に可能である。他者 Other の荷重像についても、下げる (Negative-operation 3 蔑む) か上げる (Positive-operation 4 憐れむ) かの2種類の動作が可能である。この4種類（1 誇る、2 慎、3 蔑、4 憫）の動作は、1 誇る－3 蔑む、2 慎む－4 憐れむと、自他逆対応でたがいにシャドーを形成する。

### 6. 劣位者Bにも4種類の可能動作がある

比較劣位者Bにおいても同様に、他者Otherの荷重を上げる (Positive-operation 5 敬う) か、下げる (Negative-operation 6 妬む) か、さらに自己 Ego/Self の荷重についても下げる (Negative-operation 7 卑しむ) か、上げる (Positive-operation 8 欲する) かの4動作が発生しうる。こちらの4種類（5 敬、6 嫉、7 遜、8 欲）の動作も、5 敬う－7 卑しむ、6 嫉む－8 欲する、と自他逆対応してシャドーを形成する。

### 7. 2者の荷重動作を対応させてキューブモデルを構成する

A Bの選択可能な荷重動作をそれぞれ対応させて、視覚的に直感しやすいようにキューブ状に配列する（「ソシオンのキューブモデル」木村 2002）。まず、比較優位者Aの可能な荷重動作（オペレーション）4種をキューブ前面に、比較劣位者Bの可能な動作4種を後面に配する。さらに、荷重差を拡大し自他の分化 Differentiation を促進する差異化のオ

ペレーションを右側に、荷重差を縮小し自他を同化 Assimilation する平等化 Equalization のオペレーションを左側に配列する。さらに、優位者Aが対象となるオペレーションを上面に、劣位者Bが対象となるオペレーションを下面に配列する。

8. キューブの前後の面（A、B）は荷重動作の主体を表わし、上下の面（＋／－）は客体を示す

前面の4つの頂点（1 誇、2 慎、3 蔑、4 憐）がAの感情、後面の4頂点（5 敬、6 嫉、7 卑、8 欲）がBの感情に対応する。D右側面（右翼）の動作（1 誇、3 蔑、5 敬、7 卑）は差別化を、E左側面（左翼）の動作（2 慎、4 憐、6 嫉、8 欲）は平等化を促進する。上面（1 誇、2 慎、5 敬、6 嫉）では優位者Aの余剰分（＋）が、下面（3 蔑、4 憐、7 卑、8 欲）では劣位者Bの欠如分（－）がオペレーションの対象となる。

9. キューブの頂点が、可能な荷重動作に対応する

Aの可能動作を前面上右から順に〔1 SPOD=Self POSitive Differentiation、2 SNEEQ=Self NEgative EQualization、3 ONED=Other NEgative Differentiation、4 OPOEQ=Other POSitive EQualization〕、Bの可能動作を同じく右上から〔5 OPOD=Other POSitive Differentiation、6 ONEEQ=Other NEgative EQualization、7 SNED=Self NEgative Differentiation、8 SPOEQ=Self POSitive EQualization〕と番号と記号で表現する。P/POは Positive-Operation（上向動作）、N/NEは Negative-Operation（下向動作）、Sは Self（対自）、Oは Other（対他）、Dは Differentiation（分化）、E/EQは Equalization（同化）の省略記号である。

10. キューブの垂直稜は自他反対称のシーソー動作を表現する

キューブの垂直稜のうち前面Aの稜〔1 誇る－3 蔑む、2 慎む－4 憐れむ〕と、後面Bの稜〔5 敬う－7 卑しむ、6 嫉む－8 欲する〕は、それぞれ上下一对でダイオンのシーソー動作を構成する。誇りの陰に蔑みが隠れ、欲望の陰に嫉妬が潜むように、上下で対になった感情はたがいに他のシャドーとなりやすい。

11. キューブの水平稜は荷重動作の方向を正負（P／N）に区別する

水平の稜では、Aの〔1 誇る－2 慎む、3 蔑む－4 憐れむ〕と、Bの〔5 敬う－6 嫉む、7 卑しむ－8 欲する〕の対照から見て取れるように、左右で荷重を上げる（P）か下げる

(N)か、荷重動作の方向が異なっている。右側面(右翼)では荷重差が拡大(D)し、左側面(左翼)では荷重差が縮小(E)する。

## 12. コミュニケーションの仮想交換子を考える

AとBのコミュニケーションによって、自己あるいは他者にたいする荷重が変動したとき、両者のあいだで「微小荷重」が交換されたと考えることにしよう。仮定されるプラスの交換荷重子を「ポジオン」(posion)、マイナスの荷重子を「ネクロン」(necron)と名づける(木村 2000)。

ポジオンは「アレ!」という「祈り」(愛)の意志動作(あるいは感情)から生まれ、好意や信頼、尊敬の念などが対応する。ネクロンは「ナクナレ!」という「呪い」(憎)の意志動作によるもので、不信や侮蔑、嫌悪や憎しみの念が一例である。

## 13. 前面Aと後面Bをつなぐ稜線は荷重コミュニケーションのチャンネルをあらわす

4本の稜線1誇－5敬、3蔑－7卑、2憤－6嫉、4憐－8欲は、AとBのあいだのポジオンあるいはネクロンの交換回路、つまり荷重コミュニケーションのカップリング・チャンネルをあらわす。1誇－5敬はBが送り出す尊敬のポジオンがAに届いてAが誇りを感じるコミュニケーションを、3蔑－7卑はAが発する侮蔑のネクロンをBが受けて卑下するコミュニケーションを表す。2憤－6嫉は、Bが送り出す嫉妬のネクロンを受けてAが憤むコミュニケーションを、4憐－8欲は、Aがおくる憐れみのポジオンがBの欲望をみたすコミュニケーションを表す。

## 14. キューブには6つの荷重交換ループがある

キューブは、AとBの4つの荷重動作をコミュニケーションによって連結したもの、と考えることができる。全部で6本の荷重交換ループで構成される。

### E ループ (Equalization Loop)

キューブ左面を構成するコミュニケーション・ループで荷重差が縮小する。優位者Aがみずからを「つつしみ」(2 SNEEQ)、劣位の他者Bを「あわれむ」(4 OPOEQ)ことで、AからBへ「同情」と「援助」のポジオンが送られる。なお欠如をかかえるBは、もっと「ほしがって」(8 SPOEQ) Aを「うらやみ」(6 ONEEQ)、「非難」や「ねたみ」のネクロンをおくりだす。なお、Eループ(平等化・同化)とつぎのDループ(差別・差異化)

は、A Bそれぞれの内部シーソーの反対称変換動作が媒介する。

#### D ループ (Differentiation Loop)

キューブ右側面を構成するループで、荷重差が拡大する。優位者AからBへ「蔑み」(3 ONED)などのネクロンが送られると、劣位者Bはみずからを「卑しん」(7 SNED)で劣等感をふかめる。その自己卑下の反対動作として優位者Aを「崇めよう」(5 OPOD)とするシャドーが発生する。そのポジオンはそれなりの敬意や諂いとなってAに伝わり、Aの自尊感情を増して「誇らしい」(1 SPOD) 気もちにさせる。その肥大した自尊心のシャドーとしてBにたいするいっそうの軽侮(ネクロン)がうみだされる。

#### P ループ (Posion Loop)

正の荷重交換のループでA B両者の「余剰」を増大させる。「誇り高い」(1 SPOD) Aは、弱者のBを「憐んで」(4 OPOEQ)、援助や励ましのことばを送る。そのポジオンに「助けられた」(8 SPOEQ) Bは、Aに「感謝の念」(5 OPOD)を抱く。気をよくしたAはさらに「誇り高く」(1 SPOD) 寛大になるだろう。なお、この交換は、対称な変換(互酬性)によるので、シャドーは発生しない。

#### N ループ (Necron Loop)

負の応酬によってネクロンが還流する暗いループである。Bを「蔑んで」(3 ONED)いるAは、侮蔑的な態度によってBにネクロンを放射する。その侮蔑を「屈辱」(7 SNED)としてとらえたBは、Aを「恨んで」(6 ONEEQ) いずれ無礼をはたらくだろう。この「屈辱」にAがさらに反応する(2 SNEEQ) と、両者の間には、侮蔑と嫌悪、不信と警戒が還流するNループが回転する。当然に不信と負圧がシステム内に増殖・蓄積される。

#### O P S N ループ (Other-Positive Self-Negative Loop)

「愛」による贈与のループで、時間おくれで感謝と負い目が還流する(キューブでは対角の垂直スライス面)。B(たとえば嫁)が自分を「下げて」(7 SNED) 他者A(姑)を「もち上げた」(5 OPOD) とする。「気をよくした」(1 SPOD) 姑のAは、謙譲の美德(2 SNEEQ)を発揮して、Bにたいしても「愛想がよく」なる(4 OPOEQ) だろう。このループは、他者の余剰のために相手が自ら欠如を忍んでいる、ということに対するお互

いの理解が存在することがポイントである。

#### ONS P ループ (Other-Negative Self-Positive Loop)

「欲」による闘争のループで、時間おくれで恨みあるいは疾しさが蓄積・還流する。まずBを「貶める」(3 ONED) ことでAが「自分の優位」を確保した(1 SPOD)とする。侮辱を受けたBは「なにくそ」(8 SPOEQ)、と対抗心を燃やしてAに「反発」する(6 ONEEQ) だろう。反抗的な態度に出くわしたAは、傷つけられた自分の誇りを「補償」するために(1 SPOD)、Bにさらに「高圧的」に出る(3 ONED) だろう。どちらも相手が不当に攻撃している、と確信して自尊心を防衛しようとするかぎり、この闘いのループは非難の応酬のなかでまわりつづける。

#### 15. 回帰するループは同一性を獲得する

6つのループは、当事者のサブジェクティブな意図は別にして（なかには、その意図とは逆に）時間をくぐりぬけてふたたび同一の事態へ回帰する。この場合、同一性（アイデンティティ）をもつものはループ（関係性）である。個別のソシオンは、たとえ「主体」を潜称しようとも、ネクロンやポジオンの還流するループの「僕」（subject）となっているにすぎない。

#### 16. ダイオンの荷重パターンは16種類を区別できる

ソシオン・ネットを駆動するのは、個々のソシオンの行為ではない。それぞれの特長をもつそれら6つのループ（とその記憶＝予期）こそが、ソシオン・ネットを（個々のソシオンの意図や希望を超えて）アクチュアルに駆動している。ダイオンは2者のループの荷重記憶であり、その記憶から一定の予期を投射する荷重の変換子である。まず自己あるいは他者についてP（positive）かN（negative）かで4つのパターンの組み合わせがある。それぞれについて動作の向きと順序をくべつすることで、 $4 \times 4 = 16$ のパターンが区別できる。入力をはじめに記し、つづいて予期出力をその右に記す。方向は主体からみて能動をs、受動をrであらわす。能動sは送り出す（sender）、受動rは受け取る（receptor/receiver）の頭文字である。たとえば、PsNrの表記は、自己がP（ポジオン／信頼や好意）を他者におくりだし（s）、他者からN（ネクロン／不信や嫌悪）を受け取る、というカップリングのパターンを表現している。

## Ⅵ トリオンと何か

### 1. トライアッドの荷重変換ユニットがトリオンである

トリオン (trion) は、トライアッド (triad) の第2階層で構成される3項連結の荷重変換回路である。トリオンは、その荷重変換動作によって、他者性の予期ポテンシャル (懼れや期待) とそれに対応する自己性の予期 (意志や感情) を発生する。この予期ポテンシャルが動力となって、トライアッド (3者関係) における行動を正負に誘導・制御する。

### 2. トリオンには8種類の変換パターンがある

サブソシオンA、B、C 3項のあいだの連結が正P (positive 信頼、愛情) か負N (negative 不信、憎悪) かによって、PPP、PNP、PNN、PPN、NPN、NPP、NNP、NNNの8個の状態を区別できる。8個のトリオンのシフトチャートを直方体で表わす。

### 3. N 1個 (あるいは3個) のトリオンは安定しない

Nが1個しか含まれてないトリオンでは、ループ動作によって、ある項の荷重値がPN反転する。つまり、ループが回転するたびに、荷重が正と負で反転する。Nが3個のトリオンも同様に不安定である。否定の否定は肯定 ( $N \times N \rightarrow P$ ) で、つぎつぎとプラスになる項が生まれる。不安定トリオンでは、信頼と不信、愛と憎しみのあいだで感情が揺れ動いて安定しない。

### 4. N変換を2個ふくむトリオンは安定である

トリオンはNが2個のときPN変換について同一性を保存する。たとえば、AならAに対する備給荷重は、変換のループにNが2個ふくまれているとき、もとの符合のまま安定する (マイナス×マイナス→プラス)。つまり、Nを2個ふくむトリオンでは、各表象に対する信-不信の荷重備給は強まることはあれ、反転することはない。もちろんPPPも安定である。(ハイダーが「バランス理論」で洞察したのもこの事態である。)

### 5. 不安定トリオンは安定トリオンへとシフトする

安定トリオンはPPP、PNN、NNP、NPNの4個、不安定トリオンはPNP、PPN、NPP、NNNの4個である。N 2個 (あるいはP 3個) の安定トリオンは入力

多少のゆらぎに対しては同一の状態にとどまるが、N 1 個（あるいは3 個）のトリオンはいずれ安定トリオンへとシフトしやすい。不安定トリオンから安定トリオンへの変動は、社会関係を修正・駆動する動因となる、と考えられる。

#### 6. 不安定トリオンは思考を生み出す

トリオンのループでは、媒介（迂回）による荷重と、直接（対峙）による荷重の2つの備給動作が発生する。N 2 個のトリオンでは直接荷重と媒介荷重が同一の符合となって安定するが、N 1 個のトリオンではPN反転して振動する。

同一のものがふたつの相反する荷重をもつ、という「矛盾」（「不協和」「非両立」）にさらされたとき、トリオン回路が「解」を求めて自己励起的に探索運動を発生する。安定解をもとめるこのトリオンの運動が、「思考」とよばれる選択的な意識プロセスを始動する。

#### 7. 不安定トリオンが振動状態から抜けでる道は3つしかない

不安定トリオンがシフトしうる安定状態は、図のシフトチャートで見るとおり、3 個ある。図はその可能なシフトパターンのパスをチャートで示したものである。NPN、PPN、NPP、NNNの4 個の不安定トリオンは、それぞれ思考あるいは感情の「動揺」を伴いながら、近傍の3 個の安定トリオンへシフトする論理＝回路的な可能性をもつ。

#### 8. 黒丸は不信、白丸は信頼を示し、円の大小で信不信の強さを表わす

Aが構成するトリオン $A^a$ 、 $B^a$ 、 $C^a$ の構造と動作を円と矢印で次のように表記する。ソシオンAがくりこんだサブソシオン $A^a$ を下に、 $B^a$ を左上に、 $C^a$ を右上に円で表して、互いのあいだの荷重関係を小さな丸つきの矢印で連結する。矢印の黒丸は負で不信や嫌悪、白丸は信頼や好意を示し、円の大小で荷重の量、信不信の強さを表わすことができる。矢印の向きは荷重のくりだされる方向を表わす。Aからみると、矢印の向きは荷重動作の能動・受動の別に対応する。

#### 9. PとNの3連記号表記では、左から順にAB、BC、ACの荷重関係を表わす

グラフ表記に対応して、トリオンを左から順に、AB、BC、CAの順序でPあるいはNを連記して3 項関係を記号的に表現する。

たとえば、PNNはAとBの関係がP、BとCの関係がN、CとAの関係がNであるようなトリオンの記号表記である。矢印で表現した動作の向き、つまり能動と受動の別は、

記号ではPあるいはNの下にs (sender) あるいはr (receptor) の添字をつけて表わす。たとえば、P s N N r は、AがBに好意を寄せることで、Bと仲の悪いCから煙たがられる (かもしれない)、という不安や懸念がAのサブスペースに生まれている状態を表現している。同様の事態を  $[p A B, n B C \rightarrow n C A]^a$  とも表記する。

#### 10. 安定トリオンには4種類の基本類型がある

##### 1) P P P : 友の友は友

私Aが (を) 信頼する友Bが (を) 信頼している人Cは、私は (を) 信頼する、という陽性の「予期」の変換である。このP P Pトリオンの媒介動作で、信頼や友愛のネットワークが菌糸状 (直列結合) あるいは同心円状 (並列結合) に増殖する。

##### 2) P N N : 友の敵は敵

私Aが (を) 信頼する友Bが (を) 疑う人Cは、私は (を) 疑う、というトリオンである。この変換で産出される「予期」はネガティブなポテンシャルで、Bへ (から) の信頼や愛が、Cへの不信の念やCから攻撃の危惧に変わる。愛による攻撃あるいは防衛を誘導するトリオン変換である。

##### 3) N N P : 敵の敵は友

私Aが (を) 疑っている人Bが (を) 疑う人Cは、私は (を) 信用する、という変換である。このN N P攻撃トリオンでは、疑いや不信、憎悪などネガティブな感情が信頼や愛の期待のようなポジティブな予期に変換されうる。

##### 4) N P N : 敵の友は敵

私Aが (を) 嫌っている人Bが (を) 好きな人Cは (を)、私は (を) 嫌いになる、という変換である。このN P Nトリオンでは、はじめAが (に) 抱いていたBへ (から) の不信や嫌悪の念Nが、BとCのあいだの信頼や友情Pを梃子にして、Cへ (から) の嫌悪や疑念Nへと変換されてしまう。

#### 11. 安定トリオンは荷重の変換による感情の推論エンジンである

安定トリオンは2辺が決まれば残るもうひとつの辺が決まる、という性質を利用して、必要な「予期出力」を産出する。この予期 (信であれ不信であれ) は、自分と同じように



自由をもつ他者にたいして、実際の遭遇に先駆けて「対応」を準備することを可能にする。トリオンは既知の他者との関係から未知の他者との関係を演繹する推論エンジンであり、予期ポテンシャルの変換ユニットである。それは、生きた「他者性」を構成するためにヒトの脳が開発した社会的免疫機能子である可能性が高い。

## 12. 向きをもつ基本トリオンを16個に類別する

荷重動作の方向性を区別することで、基本トリオンをその動作特性にそってさらに類別することができる。まず、単純化して、BとCとの関係はPあるいはNで固定している、と仮定しよう。Aは、BあるいはCと正Pまたは負Nの関係をもつことになる。このときAからみたBあるいはCとの関係動作が能動 s (sender) か受動 r (receptor) かを区別すると、安定トリオンは、 $4 \times 2 \times 2$  となり全部で16個のパターンが生成される。

## 13. 順序つきトリオンの全パターンを96個に類別する

1) 基本トリオンは、BとCのあいだの向きは（思考実験の便宜のため）区別していない。

B→Cなのか、C→Bなのかを区別することで、それぞれ2種類の動作パターンが識別される。全部で $16 \times 2$ で32パターンが生成する。ちなみに、このBとCのあいだの動作の向きのちがいは、どちらがどちらを攻撃しているか（Nのふりこみ）を識別するもので、Aのつぎの対応を決める上で案外重要である。

2) トリオンに動作の時間順序を導入する。入力、条件、出力の動作順序が、AB、BC、ACの順で巡るものを「循環型」と名づけ、記号Jを付記することで識別する。先にBCの関係が前提になっていて、AとBの関係が与えられたとき、AとCの関係（の予期）が出力されるものを「反射型」とよび、頭文字のアルファベット記号Hで表わす。反射型は、たとえばヤジウマ根性に対応するトリオンである。

3) ABが前提として固定されている時に、ACの関係が条件として与えられるトリオン動作がある。BとCの関係について（Aが勝手に！）期待や懸念を発生するこのトリオン動作を「誘導型」と呼び、記号Yで表わす。この「おせっかい」なトリオンは、時にBとCのあいだにNネガティブな予期を生み出す「やっかい」なトリオンでもある。

4) J、H、Yの3種類の順序を識別することで、全部で $32 \times 3 = 96$ 個のトリオンが生成

される。これらのパターンは、トリオンの構想のなかで理論的・演繹的に導出されたものであるが、すべての類型について、それなりに対応するような実際の関係を当てはめることができる。96種類におよぶトリオンのシミュレーションは木村 2001で展開した。

## Ⅶ ネットワークの力学

### 1. トリオンの動作特性は社会的性格を形成する

トリオンは、誰を、どのように、愛しあるいは護るべきかについての「予期」をさまざまな強度で投射する。類別した96種類の動作パターンは、ネットワークをめぐる愛・憎、信・不信のうねりのなかでソシオンが身をもって学習した社会関係の生きた記憶であり、各パターンが、個々の人間の対人的な感情の動作特性（社会的性格）に対応する。

### 2. ソシオンは荷重学習を通じてトリオンのパターンを内在化する

それぞれのパターンがある種の関係に対する特異的な適合性を持ち、ある種のカップリングにたいする選択的な「促進性」を発達させる、と考えられる。子どもたちは、教室や広場でこのネットワークのうねりにさらされながら、関係性の中の荷重学習をつうじて、それなりのトリオンのパターンを内在化する。いじわる、やさしさ、勇敢さ、僻みっぽさといった対人連結にからむトリオンの性格は、置かれた関係のなかで生きるために獲得された社会的免疫（socio-immunity）のパターンと見ることができる。

### 3. 無意識のトリオンが存在する

トリオンは、ネットワークの布置のなかで、時に主体の意志をこえて意識と感情を駆動する。トラウマや多重人格のケースが示すように、通常安定的に機能しているトリオンと異なったトリオンが突然のように意識を（乗っ取るかのように）駆動することが知られている。表と裏、ジキルとハイドのように、ひとりのパーソンのなかに、無意識に封印・埋蔵された「可能トリオン」が存在する、と考えられる。

### 4. 人格のインテグリティはトリオンの安定性の関数である

人間性とよばれるそのヒトの人格のインテグリティは、日常的に動作する起動トリオンの安定性の関数である。お昼の笑顔と深夜の呪詛のように、時と場合、オモテとウラによって相手にたいする荷重態度が反転することも起こりうる。人が変わったようになるの

は、起動トリオンの突然のシフトによる。

#### 5. ネットワーク上に集合的記憶が存在する

信頼であれ、不信であれ、社会ネットワークにおける荷重の集合的布置は、システム自体の動作を自動的に規定する決定的な要因であり、重要な創発特性である。なかでも、自由度2のループを時間を超えて安定的に循環・機能させる「信頼」は、ソシオンネットのもっとも貴重な資産である。

#### 6. 荷重波の集合的なうねりが発生する

予期ポテンシャルはトリオンの媒介コミュニケーションによって増幅され、ネットワークに荷重のうねり波を発生しうる。うわさや景気、評判などの波動は、荷重コミュニケーションによるポテンシャルのうねりである。わるい評判や良くないうわさは負圧のうねりである。

#### 7. 負圧の疑心暗鬼は信頼崩壊を生む

プラスの荷重波が生まれるには時間がかかるが、負圧の荷重波は速く回りやすい。とくに、繋りを解かれた負圧のうねりは疑心暗鬼の「荷重流動」となって瞬時にネットワークをのみ込む。「裏切り」や「密告」で信頼の崩壊したソシオンネットは、猜疑と不信の増殖によって、「ソシオネクロシス」(socio-necrosis) とでも名づけるべきブラックホール状態へとつぶれこんでいくリスクをもつ。

#### 8. 安定トリオンはリアリティの感覚を発生する

PPP、NNP、PNN、NPNの4つの安定トリオンでは、正負の荷重ポテンシャルが変換(荷重の循環)に対して保存される。安定トリオンのループに囚われた人間の意識は、「妄想」をリアリティとして生きる。とくに、「アルもの(N/P)がナイ」(「アルはずがナイ」)という「否認」と、「ナイもの(P/N)がアル」(「ナイはずがナイ」)という「猜疑」が重要である。トリオンの回帰動作が反復するほどに、「かもしれない」から「ちがいない」へ、また「はずがない」や「なければならない」へと、予期の強度つまりリアリティの感覚が強まる。

#### 9. トリオンは「べき・はず」でロックする

NPNトリオンはやっかいな被害妄想を生みだす。対向するBとCの良好な関係Pが、自分Aを攻撃あるいは愚弄する「結託」や「陰謀」として意識されやすいからである。AとB、AとCのあいだに強い不信のN結合がある場合には、BとCとの友愛や自然な談笑ですら、自分Aにたいする排除と攻撃を告げる陰謀のシグナルとして生きられる（「みんなグルだ！」）だろう。他者たちの幸せそうな歓談が、唾棄すべき結託のシルシに見えてくるのだ。

#### 10. アルものがナイという妄想がある

能天気なPPPトリオンは、BとCのあいだの不和や闘争の存在を否認する妄想、というより存在しない平和や愛を幻想する妄想を産出する。私AがB、Cと良好な関係（P）を保持していれば、BとCが争い合う（N）といったことはあってはならないし、またあるはずがないのである。いわゆる平和主義者の妄想（幻想）はおそらくこのPPPトリオンの動作による。

#### 11. アナタとアナタの関係は私の存在の一部である

私AはアナタBの目をサシで見ることができる。またもうひとりのアナタCの目もその気になれば見ることができる。しかし、アナタBとアナタCがたがいに見交わすその目を私Aは直接見ることができない。これは、社会的な種である人間にとって重大問題である。私のBあるいはCにたいする信頼や不信の感情は、一見私と無関係なBとCの関係によってトリオン的に規定されるからである。逆に、私AのアナタBに対する感情とアナタCに対する感情が、アナタBとアナタCの見えない関係を規定する。アナタとアナタの関係は私の（トリオンの）重要な要素である。

#### 12. 夫婦仲の悪い子どものトリオンは不安定化する

夫婦BCの仲がよくないとき、子どものころはかき回される。母Bをかわいそうに思えば父Cが憎く（PNN）、父Cにつけば母がうとましい（NNP）。仲のわるい夫婦のあいだをいったり来たりする子どもは、両の手を引き裂かれるのではなく、胸を引き裂かれる。ヨリをもどしたとたんその子をしかりつけたりする親はさらに危険である。護ってくれるかとおもえば手ひどい裏切りに合うかもしれないアナタたちの間で、人間は「基本的信頼」を形成できないまま、不信を橋脚にもつ特有のトリオン（NPN）を発達させる。

## Ⅷ ソシオスの構成

### 1. 自己性を保存するソシオネットをソシオスと呼ぶ

免疫機能をもったネットワークをソシオス (socios) と呼ぶ。王やカリスマ的指導者を讃美する民衆の熱狂の輪がこのソシオスの典型である。中心のソシオンXへの献身が要請される (民衆にとっては) 「能動型」、慈愛や栄光のようなポジオンが中心から照射される「受動型」、互酬性をもつ「相互型」が区別できる。中心のソシオンにネクロンをふり込む者は、「不敬」を働く異分子として排除・攻撃されることが多い。ひとつの話題を共有して領きあう仲間も小さなPソシオスを形成している、といえよう。

### 2. 単極ソシオスにはP型ソシオスとN型ソシオスがある

中心のソシオンXにP結合した並列ネットワークをP型ソシオスと呼び、中心のソシオンYとN結合した並列ネットワークをN型ソシオスと呼ぶ。悪者や嫌われ者Yにたいして否定的言動Nをとることが、仲間うちの連帯Pを強めることは昔からよく知られている。非難や、抗議による連帯の環も、このN型ソシオスの一例である。うっかりYを弁護したりすると、仲間はずれになるのは、このソシオスの免疫機能による。

### 3. 双極ソシオスは社会の基本型 (プロトソシオス) を構成する

Xに対するP結合と、Yに対するN結合がともに成立して、XとYがN結合している双極ソシオスを考える。内部のソシオンからみると、同位のソシオンとPPP結合が成立し、しかも両極とのあいだでPNNもしくはNNP結合が垂直に成立している。正義や神Xと悪や魔女Yのようなスーパーソシオンを両極にもつこのソシオスは、両者の否定結合を媒介しながら、愛と憎しみを増幅しあう強力なネットワークを形成する。神Xが異教徒Yの制圧を命じる場合、逆に闇の力Yによって神Xが攻撃にさらされる場合など、否定結合のいくつかのパターンがある。

### 4. ふたつのソシオスが相互にN結合でロックしたネットワークが存在する

複数のソシオスがN結合すると、たがいにインターロックした超ソシオス生まれる。一方のソシオスS1は、他方のソシオスS2に侵入する「外敵」となり、この敵への警戒と憎しみ (N/ネクロン) が「内部」の結束 (P/ポジオン結合) を強化する。強化された連帯のPエネルギーは、いっそう強力な攻撃力Nに変換されて、戦いへと誘導される。

こうしてインターロックした超ソシオスは、古くから家族、部族、トーテム、民族、宗教、王国など種々のレベルで観察されるが、上位レベルのインターロック／N結合の発生が、下部のネットワークのP結合を促進する、という共通の傾向がみられる。

#### 5. 中心の媒介者MがスーパーソシオンX、Yを直列に媒介する

並列にP結合する民々のソシオン $\Sigma Si$ の中心に司祭役となるソシオンMが存在して、スーパーソシオンXあるいはYとの結合を媒介する場合がある。各ソシオン $Si$ はMとの結合を媒介にしてXもしくはYと直列に結合する。このときソシオン $Si$ が構成するXあるいはYの存在の荷重（リアリティ）は、ソシオンMに対する $Si$ の信頼の大きさ（チャンネル荷重）と、媒介するソシオンM（Mediating Socion、略して Medion と呼ぼう）がスーパーソシオンX、Yに対してもつ尊崇の念や恐怖の感情（メッセージ荷重）の積となる。

#### 6. 媒介によって超越荷重体生まれる

ソシオン $Si$ がメディウムMに絶大な信頼を置いている場合、X、Yのリアリティは、超越的な絶対性を帯る。X、Yの存在をだれも検証できない場合には、その超越的な荷重ポテンシャルは、この世で予期しうる最大限のリアリティ（を生み出す力）としてネットワーク上に温存・封印される。神や悪魔、天国や地獄、来世や他界といった超越的存在は、ネットワーク上で構成された超越荷重体が、媒介コミュニケーションによって絶対化され、禁止によって封印されたものである。

#### 7. 両極に超越荷重体をもつ意味のネットワークは閉じられる

「世界」の上限と下限を正負の特異点によって閉じられた表象のネットワークをセミオス（Semios）と呼ぶ。Mの媒介によって張られるこの表象のネットワークは、愛と憎悪、希望と恐怖の特異点によって両極を閉じられた予期ポテンシャルの勾配ベクトル場として概念することができる。ソシオンである人間が生きる「世界」は、メディオンの媒介によって張られた予期ポテンシャルの場であり、それはしばしば死後の業苦や永遠の楽園など、検証できない超越荷重体によって両極を閉じられた表象Sと荷重Rのネットワーク、「意味の繭」＝セミオスを構成する。

#### 8. 富者と貧者の多重現実と文明のモデルをつくる

上部に王侯貴族Xを、下部に貧民奴隷Yを配し、中心にこれを媒介するメディオンMを

おいたネットワークを考える。欲望のキューブとともに提起したソシオン空間のフェイズモデル(木村 2002)は、これら持てるものと持たざるものの格差が、拡大あるいは縮小する様子を記述するものであった。ここで、図の右に王党派のソシオン $Si(R)$ を、左に平民派のソシオン $Sj(L)$ を配すると、ソシオンネットの運動を駆動するトリオンの力を記述することができる。

#### 9. 教官と預言者の2つの媒介メディウム

メディウム $M1$ は、 $Si$ に王侯 $X$ への敬愛と尊崇の念を教化し、同時に、しばしば反乱 $Nyx$ を起こす奴隷 $Y$ への警戒と嫌悪感を吹き込んだとしよう。メディウム $M2$ は反対に、 $Sj$ に対して奴隷たちへの同情心をかきたてると同時に、これを抑圧する $Nxy$ 貴族たちへの反感を吹き込んだとする。 $Si$ は教官 $M1$ を信頼し、 $Sj$ は預言者 $M2$ を信仰するかぎり、ここに $P$  $N$ が反対称のふたつのトリオンが成立する。

#### 10. トリオンは相互誘導的に予言を実現する

しかも、もし $Si$ や $Sj$ たちが貴族たちと直に触れあえず、また奴隷たちとも隔離されれば、スーパーソシオンの偉大さも凶悪さももはや反証されることはない。右側のトリオンをもつ王党派はこころ置きなく身分差の保全と拡大を目ざし、左側のトリオンをもつ平民派は身分差の撤廃と平等を目ざして闘争に立ち上がる。そして実際に暴動が起こり弾圧が行われれば、抑圧仮説、反乱仮説ともに実証されて、トリオンの予言が相互誘導的に実現する。

#### 11. 正常な個体が殺戮を行うのが人類の種としての特質である

ヒトとして極めて正常な個体が大変異常な殺戮を行う、という人類の種としての特質が、こうして、トリオン仮説から合理的に導かれる。戦争と内乱は、単なる狂気の沙汰ではない。それは、個体が狂ったのではなく、むしろ、愛と正義の情念にとり憑かれたから起るのであり、その「至上の愛」がトリオン回路によって「憎悪」へと変換されるのである。戦争と殺戮は、 $N$ 結合をもつトリオンの相互誘導からくる極めてノーマルなヒトの悲劇である。

#### 12. 不幸の力学とループの転轍について考える

人類のネットワークの奇妙な免疫不全、内乱と戦争、そして内部の肅清が歯止めを失ったとき、相互破壊と滅亡への道をたどりうることは、この間の人類の歴史が証明した。人

類が手にした社会的免疫機能が逆に機能して、ネットワークが自己免疫性の免疫不全に陥った（ソシオネクロシスに罹患した）と考えられる。

次回は分裂結合、反対効果、軌道の分岐、トリオンのループトラップといったテーマが論じられる。人類を襲う不幸のメカニズムが狂気の果てでも異常の極みでもないことが明晰に理解されれば、不要な悲劇を回避する道も開かれるだろう。

（図版と文献は次号に掲載します。）

（つづく）

—2004.10.5受稿—